

本学心理学科学生の性格特性：  
ビッグファイブを用いて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-09-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川上, 正浩 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4579">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4579</a>

# 本学心理学科学生の性格特性

ービッグファイブを用いてー

川上 正浩

臨床心理学専攻教授

## 要約

本研究は、本学心理学科1年生を対象に実施した性格検査の結果について報告するものである。2008年から2013年にかけて、本学心理学科1年生を対象に和田(1996)のBFSを実施し、その年次変化を傾向分析した。また、他大学で収集したデータや先行研究にて報告されているデータと比較検討を行った。その結果、2008年から2013年にかけては、本学心理学科1年生の、ビッグファイブによって測定される性格特性には調査年による差異は見いだせないこと、他大学や先行研究にて報告されているデータと比較して、本学心理学科学生は、ビッグファイブにおける外向性、誠実性、調和性が低い傾向が認められることが明らかになった。

**キーワード：**本学学生、心理学科、ビッグファイブ、縦断調査、傾向分析

## I 問題と目的

本研究の目的は、2008年から2013年にかけて、大阪樟蔭女子大学心理学科1年生に対して実施した性格検査(BFS:和田,1996)の結果について報告し、年次ごとの差異、他大学学生との比較、の2つの観点から検討を行うことである。

性格特性という個人差は、教育の観点からも関心を集めてきた。古くは1960年代から、研究者が所属する大学に属する大学生の性格特性を明らかにしようとする研究が認められる(村川・清水,1967;山本ら,1966)。たとえば山本ら(1966)は、「学生の指導にあたって、対象となる学生の性格を把握し、その性格特性に応じて、学生個人や、グループに対する指導を工夫したならば、教育的効果をより高めることができるのではないか」と考え、彼らが所属する大学の学生に性格テスト(東大式総合性格検査)を行い、その結果を報告している。

また田中ら(1983)は「教育においては、理想とするとところの教育目標をもつとともに、その教

育活動において、対象となるものの実態をより正確に、かつ、すみやかに把握することによって具体的な実践目標及び指導方法が計画されてくる」としたうえで、「看護教育においての、その理想的な教育目標は、専門的な知識と技術とを習得するとともに、看護婦として望ましい“Personality”を形成することにある。」としている。そしてこのために「でき得る限り早い時期にそれぞれの性格特性を客観的な方法により把握し、適切な指導を確立」することが重要であると述べている。

また林(2007)は、「学生らの指導や講義においてそれらを考慮したり、また良い部分を伸ばしたり足りない部分を補ったりすることで、学生らの質の向上につながる」と考え、「学生の性格特性を明らかにする」ことを目的として、東大式エゴグラム(TEG)を用いて継続的に研究を行っている(林,2007,2008,2009)。すなわち、学生の性格特性を知ることにより、これを教育の目標と照らし合わせながら、個人特性を捉え、教育方法を検討していくことには価値があると考えら

れてきた。

さらに、朴澤・松井(1969)のように、所属大学、というよりは、“運動選手”といったような、専攻領域と性格特性との関連に注目した研究も認められる。朴澤・松井(1969)は「スポーツマンとして望ましい人格とは、一体何をめざして育成されなければならないのか」という問いを立て、所属する大学の体育学部学生を対象としてYG性格検査を実施し、彼らが中学および高校時代に所属していた運動クラブや選手としての経験年数などに基づき類型化を行ったうえで、運動クラブ経験者の性格特性について検討を行っている。

同様に、吉村ら(1987)や吉村・野島(1988)、吉村ら(1998)は、馬術競技選手の性格特性に焦点を当てて検討を行っている。これらも先に述べた教育目標と個人特性の相互作用を考える研究であると言える。

こうした、自学に所属する学生について、その性格特性の検討を行った研究には、YG性格検査を用いたもの(朴澤・松井1969;石田ら,1993;村川・清水,1967;中林・深町,1990;中村,2003;中澤ら,2008;岡田ら,1992;大沢,1991;大浦・宮嶋,1984;佐々木ら,1998,1999;佐々木ら,1996;吉村ら,1987;吉村ら,1998),エゴグラムを用いたもの(青木,2000,2001,2002,2003,2008;武藤,1995,1996;松田ら,2010;蕪澤ら,2005;落合,2010;齋藤ら,1999;齋藤ら,2000;志渡ら,2007;志渡ら,2005;志渡ら,2006;高鳥ら,2005;上原,2003),UPIを用いたもの(青木・佐藤,2013;願興寺ら,2007;濱田ら,1991;濱田ら,1992,1994;橋本・垂見,2014;入江ら,2015;石川,2003;泉水ら,2012;木下ら,1997;小柳,1987;黒田ら,1985;前垣・滋野,2011;南,2003;宮下ら,2009;宮田ら,2013;中藤,2004,2005,2006,2007,2008,2009,2010;中川ら,2006;中井ら,2007;荷方ら,2012;西山・笹野,2004;大江ら,1984;岡ら,2015;岡田ら,1992;奥村ら,1986;辻ら,1987;坂口,2009;高岸ら,2013;竹淵,2006;渡辺・宗野,2011;安福,1978,1982,1984;吉

武,1995,1996),EPPSを用いたもの(肥田野ら,1986;石原,1994;大沢,1991;瀧ヶ崎・藤村,1997;佐藤ら,1977),MMPIを用いたもの(井手,2010;伊藤,1995;角川・高宮,1987;田中,1972,1973),ビッグファイブを用いたもの(鈴木・阿久津,2007;高岡・佐藤,2014;谷ら,2012,2013;安永ら,2009)など、多くのものが認められる。特に、UPIを用いた研究が多く認められる背景には、自学学生の不適応について早期に発見し、これに対応することをめざす、大学側の関わりを前提としたものが多いからであろう。

これら以外の検査を用いた報告も認められ、たとえば麻賀ら(2001)は、特性不安尺度(STAI)、自己抑うつ尺度(SDS)などを用いて、彼女らが所属する千葉県立衛生短期大学歯科衛生学科の、1996年から1999年までの新入生に対して継続的に実施した性格検査の結果を報告している。

さらに、青木(2001)のように、学生の性格特性を他の集団との比較において捉えるための研究も行われている。青木(2001)は、彼女が所属する聖園学園短期大学が「保育科のみの単科大学」であることから、「子どもが好きな学生が入学しており、やさしく、明るい学生が多い。」としたうえで、「それらの性格特性は、実習を重ねていくうちに、保育者として望ましい資質に変容されていっている。」と述べている。そして、エゴグラムに認められる「自分の気持ちを抑えて相手の気持ちにそおうと努めるAC(順応した子供の心)が高く、客観的に物事を判断するA(大人の心)が低い」という学生の特徴が、彼女の所属する大学だけの特徴なのか、保育科に特有の特徴なのか、あるいは、現代学生の特徴であるのか、という疑問から、エゴグラムを用いて、保育科学生と看護科学生との性格特性の比較検討を行った。調査の結果、保育科学生と看護科学生とでは、協調的でやや自分の気持ちを抑えて相手の気持ちにそおうとする従順な学生が多いという共通点がある一方で、保育科では受容、共感的で優しい学生や活発で明るい学生が多く、看護科学生は、事実に基づ

いた客観的な判断力や批判力が高く、合理的で沈着、冷静な傾向が強いという差異も示された。

UPIを用いた吉武(1995)も、比較的共通性の高い(都内にキャンパスがある、英文科を設置している、女子短期大学である)2つの短期大学女子大学生のデータを比較検討している。

また南(2003)も、UPIを用いて、介護福祉士、看護師、保育士など対人ケア専門職をめざす学生のデータを収集し、所属別のUPI得点を比較した。その結果、UPI得点は看護専門学校の1年生で最も高く、介護福祉士養成の短期大学II部の学生で最も低い傾向が示された。

また、MMPIを用いた塩谷(1996)も、工科大学の1年生と看護学校の1年生を比較し、男性性・女性性の尺度において差異を見いだしている。

本研究では、本学心理学科学生の性格特性に関するデータを報告する。そして本研究では、近年のパーソナリティ理論においてその中核的な位置を占めている、ビッグファイブ(Big Five: Goldberg, 1990, 1992)を用いた検討を行う。パーソナリティ特性を大きく5つの枠組みで捉えるビッグファイブは、性格を表す語彙を収集・分類したAllport & Odbert(1936)のアプローチに端を発するものであり、外向性(Extraversion)、神経症傾向(Neuroticism)、開放性(Openness to Experience)、誠実性(Conscientiousness)、調和性(Agreeableness)の5つをその基本的特性次元とする。外向性は、人との関係などにおいて、外界に積極的に働きかけるかどうかの次元である(杉浦・丹野, 2008)。神経症傾向は、危機に敏感に反応するか否か、開放性は、イメージや思考が豊かで遊び心を持っているか否かの次元である(杉浦・丹野, 2008)。そして、誠実性は、はっきりとした目的や意志を持って、物事をやり抜こうとするか否か、調和性は、人との関係において、周囲に同調しやすいか否かの次元である(杉浦・丹野, 2008)。

本研究では、調査1において、2008年度から2013年度までの本学心理学科1年生に対してその性格特性を和田(1996)のBFSを用いて測定

し、その経年変化を吟味する。さらに、調査2では、他大学でのデータ収集を行い、このデータや先行研究のデータとの比較において、本学心理学科1年生の性格特性の特徴を検討する。

## II 調査1

### 方法

**調査年月日** 調査は2008年、2010年、2012年、2013年の6月下旬あるいは7月上旬に実施された。

**調査対象者** 2008年70名(平均年齢18.5歳,  $SD=0.55$ ), 2010年67名(平均年齢18.4歳,  $SD=0.66$ ), 2012年66名(平均年齢18.2歳,  $SD=0.44$ ), 2013年62名(平均年齢18.2歳,  $SD=0.57$ )の本学心理学科(調査年により臨床心理学科, 発達教育心理学科, ビジネス心理学科)に所属する大学1年生女子が調査に参加した。

**質問紙の構成** 和田(1996)のBFS60項目を使用した。回答方法は“まったくあてはまらない(1)”から“非常にあてはまる(7)”までの7件法が用いられた。

**手続き** 調査は心理学系の授業時間内に、コースクレジットとして実施された。調査対象者には調査目的が説明され、了解のうえで調査に参加することが求められた。調査対象者には各自のペースで回答することが求められた。すべての調査対象者の記入が終わった段階で、質問紙は回収された。

### 結果と考察

和田(1996)に倣い、ビッグファイブを構成する外向性、神経症傾向、開放性、誠実性、調和性の5つの下位尺度得点を算出した。ただし、和田(1996)においては、各下位尺度得点は、7件法12項目の合計として定義されていたが、欠損項目の存在を考慮し、7件法12項目(欠損項目があれば項目数はより少なくなる)の平均点を算出し、これを12倍することにより各下位尺度得点を算出した。そのうえで調査年ごとに、ビッグファイブを構成する下位尺度得点の平均値および標準偏差を算出した(表1, 図1)。

調査年ごとの本学心理学科1年生の性格特性に

差異が認められるか否かを検討するため、調査年(2008年, 2010年, 2012年, 2013年)×次元(外向性, 神経症傾向, 開放性, 誠実性, 調和性)の2要因分散分析を実施した。その結果, 次元の主効果 ( $F(4,1044)=81.663, p<.01$ ) は有意となったが, 調査年の主効果 ( $F(3,261)<1, n.s.$ ) および両者の交互作用 ( $F(12,1044)<1, n.s.$ ) は有意ではなかった。すなわち, 調査年ごとの本学心理学科1年生の性格特性に, 統計的な差異は認められなかった。

結果から, 本学心理学科1回生の性格特性については2008年から2013年までの比較においては

安定しており, 一貫した性格特性を有していることが示唆された。続く調査2では, 本学のデータと他大学のデータを比較するため, 他大学で同様の調査を行い, その結果を調査1のデータと比較する。併せて, 先行研究から本学データ(調査1)と比較可能なデータが記載されているものをピックアップし, それとの比較も行う。

### Ⅲ 調査2

#### 方法

調査年月日 調査は2005年, 2007年, 2008年の9月に実施された。

表1 本学心理学科学生のビッグファイブ平均得点 (max=84, 括弧内はSD)

	2008年 (N=70)	2010年 (N=67)	2012年 (N=66)	2013年 (N=62)
年齢	18.3 ( 0.82 )	18.4 ( 0.66 )	18.2 ( 0.44 )	18.2 ( 0.57 )
外向性	51.4 ( 12.07 )	49.9 ( 10.92 )	52.2 ( 13.34 )	52.2 ( 13.86 )
神経症傾向	58.4 ( 13.87 )	56.9 ( 11.98 )	57.0 ( 14.96 )	59.3 ( 12.18 )
開放性	47.0 ( 10.32 )	47.8 ( 9.13 )	49.1 ( 8.24 )	46.7 ( 9.98 )
誠実性	41.9 ( 8.74 )	40.9 ( 9.66 )	41.0 ( 8.69 )	41.4 ( 9.35 )
調和性	50.4 ( 9.66 )	49.2 ( 8.20 )	48.9 ( 10.54 )	50.3 ( 10.96 )

表2 N大学学生のビッグファイブ平均得点 (max=84, 括弧内はSD)

	2005年 (N=74)	2007年 (N=50)	2008年 (N=47)
年齢	18.6 ( 1.07 )	18.4 ( 0.50 )	18.5 ( 0.55 )
外向性	54.7 ( 11.71 )	54.0 ( 13.07 )	52.5 ( 10.69 )
神経症傾向	55.8 ( 12.69 )	57.9 ( 13.49 )	56.6 ( 12.56 )
開放性	48.0 ( 8.51 )	46.1 ( 9.10 )	45.2 ( 9.69 )
誠実性	43.3 ( 8.89 )	43.3 ( 9.07 )	42.8 ( 9.92 )
調和性	51.9 ( 7.82 )	49.6 ( 9.52 )	50.8 ( 8.81 )

表3 本学, N大学学生のビッグファイブ平均得点 (max=84, 括弧内はSD)

	本学全データ (N=265)	N大学全データ (N=171)
年齢	18.3 ( 0.64 )	18.5 ( 0.81 )
外向性	51.4 ( 12.51 )	53.9 ( 11.79 )
神経症傾向	57.9 ( 13.26 )	56.6 ( 12.81 )
開放性	47.6 ( 9.43 )	46.7 ( 9.02 )
誠実性	41.3 ( 9.05 )	43.2 ( 9.16 )
調和性	49.7 ( 9.82 )	50.9 ( 8.59 )

**調査対象者** 2005年74名（平均年齢18.6歳， $SD=1.07$ ），2007年50名（平均年齢18.4歳， $SD=0.50$ ），2008年47名（平均年齢18.5歳， $SD=0.55$ ）の愛知県の私立N大学（福祉系）に所属する大学1年生女子が調査に参加した。

**質問紙の構成** 調査1と同様の質問紙が用いられた。

**手続き** 調査は心理学系の集中講義授業時間内に、コースクレジットとして実施された。調査対象者には調査目的が説明され、了解のうえで調査に参加することが求められた。この際、各調査対象者には各自のペースで回答することが求められた。すべての調査対象者の記入が終わった段階で、質問紙は回収された。

**結果と考察**

調査1と同様の方法で、ビッグファイブを構成する外向性、神経症傾向、開放性、誠実性、調和性の5つの下位尺度得点を算出した。そのうえで調査年ごとに、ビッグファイブを構成する下位尺度得点の平均値および標準偏差を算出した（表2，図2）。

調査年ごとのN大学1年生の性格特性に差異が認められるか否かを検討するため、調査年（2005年，2007年，2008年）×次元（外向性，神経症傾向，開放性，誠実性，調和性）の2要因分散分析を実施した。

その結果，次元の主効果（ $F(4,672)=46.780$ ， $p<.01$ ）は有意となったが，調査年の主効果（ $F(2,168)<1$ ， $n.s.$ ）および両者の交互作用（ $F(8,672)<1$ ， $n.s.$ ）は有意ではなかった。すなわち，調査年ごとのN大学1年生の性格特性に，統計的な差異は認められなかった。

次に本学学生データ（調査1）とN大学学生データ（調査2）とで，得点に差異が認められるか否かを検討するため，以下の2つの分析を行った。

まず，調査1と調査2とで共通調査年に収集したデータである，2008年のデータについて，大学間で得点に有意差が認められるか否かを検討するため，調査1，調査2から，2008年のデータの

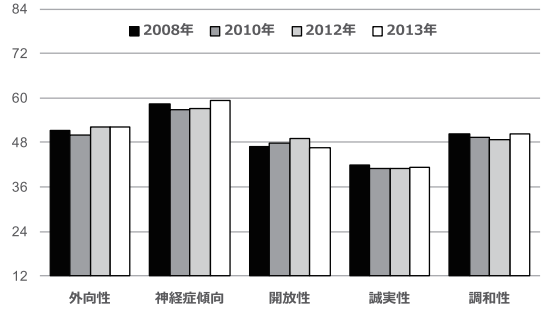


図1 本学心理学科学生のビッグファイブ得点

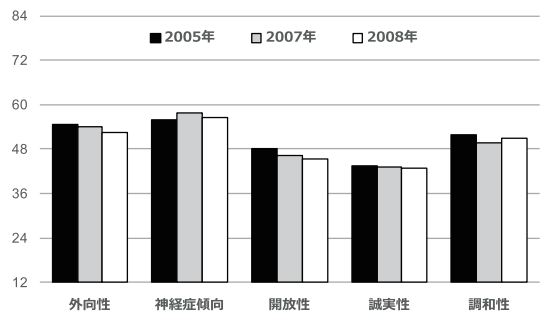


図2 N大学学生のビッグファイブ得点

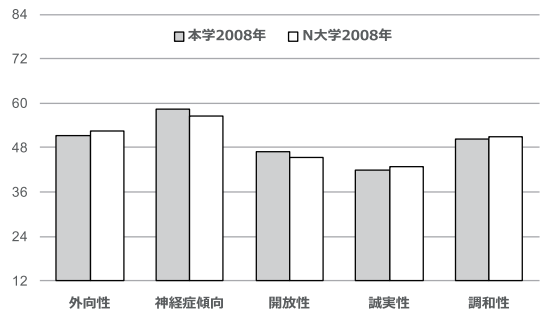


図3 本学とN大学の得点比較（2008年）

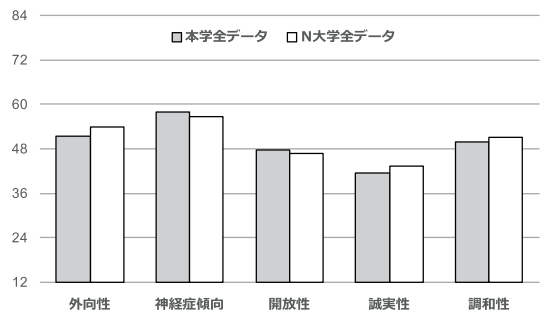


図4 本学とN大学の得点比較（全データ）



みを取り出し、得点の比較を行った(図3)。大学(本学, N大学)×次元(外向性, 神経症傾向, 開放性, 誠実性, 調和性)の2要因分散分析を実施した結果, 次元の主効果( $F(4,460)=34.295, p<.01$ )は有意となったが, 大学の主効果( $F(1,115)<1, n.s.$ )および両者の交互作用( $F(4,460)<1, n.s.$ )は有意ではなかった。すなわち, 2008年のデータについて, 2つの大学間で下位尺度得点に有意な差異は認められなかった。

次に, 調査1, 調査2で収集したすべてのデータを調査年にかかわらず大学ごとに一括し, 得点の比較を行った(図4)。大学(本学, N大学)×次元(外向性, 神経症傾向, 開放性, 誠実性, 調和性)の2要因分散分析を実施した結果, 次元の主効果( $F(4,1735)=118.793, p<.01$ )は有意となったが, 大学の主効果( $F(1,434)=1.732, n.s.$ )は有意とはならなかった。両者の交互作用( $F(4,1735)=2.657, p<.05$ )が有意であったため, 単純主効果の検定を行ったところ, 外向性( $F(1,2170)=5.501, p<.05$ )の単純主効果が認められ, 本学学生の外向性が, N大学学生の外向性より低いことが示された。また, 誠実性( $F(1,2170)=3.124, p<.10$ )の単純主効果が10%水準で認められ, 本学学生の誠実性が, N大学学生の誠実性より低い傾向が示された。神経症傾向( $F(1,2170)=1.455, n.s.$ ), 開放性( $F(1,2170)<1, n.s.$ ), 調和性( $F(1,2170)=1.315, n.s.$ )については, 大学の単純主効果は認められなかった。

本学心理学科学生の性格特性を他大学との比較においてより詳細に検討するため, 先行研究の中から, 女子大学生のBFS下位尺度得点の平均値および標準偏差が報告されているもの(齋藤ら, 2001; 鈴木・松田, 2012)をピックアップした。

齋藤ら(2001)は, 1999年に福岡県内の国立大学2校, 私立大学1校, 私立短期大学1校の4大学に所属する大学生を対象にBFSを集団実施した。また鈴木・松田(2012)は, 2010年から2011年にかけて, 首都圏の私立大学2校に所属する大学生を対象にBFSを集団実施した。これらの報告されたデータと本学のデータとを比較す

る。

齋藤ら(2001)と, 本学全データを用いた得点の比較を行った(図5)。 $t$ 検定によって, 外向性( $t(835)=5.345, p<.01$ ), 誠実性( $t(835)=2.627, p<.01$ ), 調和性( $t(835)=10.330, p<.01$ )に1%水準, 開放性( $t(835)=2.450, p<.05$ )に5%水準, 神経症傾向( $t(835)=1.776, p<.10$ )に10%水準で有意差が認められた。以上の結果は, 本学学生データは, 外向性, 開放性, 誠実性, 調和性が, 齋藤ら(2001)に参加した学生よりも低く, また神経症傾向については高い傾向にあることを示している。

また, 鈴木・松田(2012)と, 本学全データを用いた得点の比較を行った(図6)。 $t$ 検定によって, 誠実性( $t(393)=4.615, p<.01$ ), 調和性( $t(393)=5.320, p<.01$ )に1%水準, 開放性( $t(393)=5.320, p<.10$ )に10%水準で有意差が認められた。すなわち, 本学学生データは, 鈴木・松田(2012)に参加した学生よりも誠実性, 調和性が低く, また開放性も低い傾向にあることが示

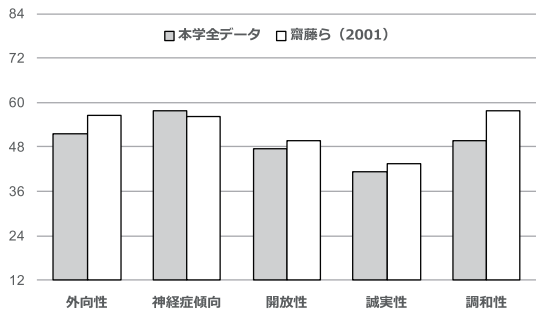


図5 本学と齋藤ら(2001)の得点比較

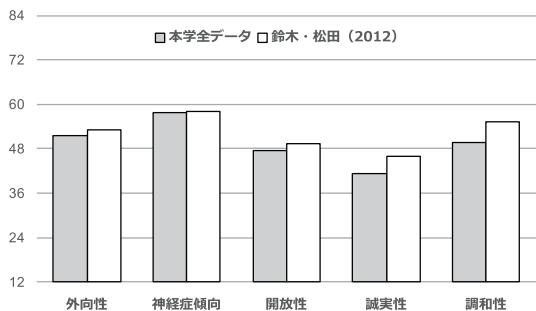


図6 本学と鈴木・松田(2012)の得点比較

された。外向性 ( $t(393)=1.307, n.s.$ ), 神経症傾向 ( $t(393)=0.044, n.s.$ ) には差が認められないことが示された。

以上のことから、本学学生の性格特性としては、他大学学生と比較して、外向性、誠実性、調和性が低いことが挙げられそうである。

#### IV 総合考察

本研究では、本学心理学科学生（1年生）の性格特性を和田（1996）のBFSを用いて測定し、その経年変化に着目すると同時に、他大学の学生のデータと比較した。まず2008年、2010年、2012年、2013年の4年分の本学心理学科1年生のデータを比較したところ、統計的な意味での有意差は認められなかった。教員として学生と関わっていく中で、“学生像の変化”については、話題に上ることも多いが、少なくとも今回の研究においては、性格特性という意味でのそうした差異を検出することはできなかった。心理学を志す学生に一定の特性がある可能性もあるが、本学心理学科独自の特徴が、“学生募集”、広報活動を通じて、一定の特性を持つ学生の志望を高めている可能性もある。

一方で、調査2で収集した他大学に所属する1年生のデータや、先行研究で報告されている他大学学生のデータと比較してみると、本学心理学科学生の特徴がうかがえる。それは、外向性、誠実性、調和性の低さである。そもそも外向性の低さは、控えめであることや気後れにつながる（杉浦・丹野、2008）ともされるが、一方では自分の興味や関心が外部よりも内部に向かいやすい傾向であると言える。そうした意味では、まさに自己の内部、内面である“心理”に関心が向きやすいことは、専攻する学問として心理学を志すことと整合性が高いと考えられる。また、誠実性の低さは、はっきりとした目的を意識しない、あるいはそれにとらわれない傾向であるとも考えられる。心理学という学問が、もちろんカウンセラーといった専門職につながる学問ではあるが、必ずしもはっきりした1つの職業を指向する学問ではないこと

を考えれば、誠実性の低さは、心理学という学問を専攻として志向することと整合的であると考えられることができる。

比較対象としているデータの収集年が異なることや、共学か女子大か、国立大学か私立大学か、短期大学か4年生大学か、あるいは対象学年などといった様々な違いを多く含み込んだうえでの比較であるので、どこまで“本学の”学生の特徴であるか考えるかは議論があるが、年次変化がほとんど認められないことと併せて考えると、我々が教員として本学の教育に携わっていくうえでは、こうした傾向を心にとどめておくことは有用であると考えられる。

青木（2002）は、エゴグラムを用いて1年生と2年生とでどのような性格特性の違いが見られるのか、自尊感情との関わりからその学年差に注目している。心理学的な教育についても、その教育の効果、影響が性格特性のレベルで現れると想定するならば、心理学教育を受けることの効果はBFSやTIPI-J（小塩ら、2012）で測定される性格特性（ビッグファイブ）にどのように反映されるのか、検討を行うことも課題である。

#### 文献

- Allport, G. W., & Odbert, H. S. (1936). Trait-names: A psycho-lexical study. *Psychological Monographs*, 47, i-171.
- 青木光子（2000）. 本学保育科学生の自我状態と不安性格特性、自尊感情の関係について. 聖園学園短期大学研究紀要, 30, 1-18.
- 青木光子（2001）. エゴグラムに見られる保育科学生と看護科学生の性格特性の比較検討. 聖園学園短期大学研究紀要, 31, 43-57.
- 青木光子（2002）. 本学学生のエゴグラムによる性格特性と自尊感情に関する考察. 聖園学園短期大学研究紀要, 32, 25-37.
- 青木光子（2003）. 本学学生の透過性調整力と各自我状態および不安性格特性との関係についての一考察. 聖園学園短期大学研究紀要, 33, 19-35.



- 青木光子 (2008). 本学学生の透過性調整力と各自我状態の関係についての一考察. 聖園学園短期大学研究紀要, **38**, 1-10.
- 青木智子・佐藤笙子 (2013). UPI の結果から見た学生支援の在り方 ～A大学のケースを考える. 平成国際大学論集, **18**, 157-172.
- 麻賀多美代・麻生智子・鈴鹿祐子・石田洋子・日下和代・保坂 誠 (2001). 本学歯科衛生学科学学生の性格特性調査 -入学直後の調査から-. 千葉県立衛生短期大学紀要, **19**, 49-54.
- 武藤眞佐子 (1995). エゴグラムからみた看護学生の特徴. 岩手女子看護短期大学紀要, **3**, 17-32.
- 武藤眞佐子 (1996). 本学学生の性格特性とエゴグラムの特徴 -2年次学年末におけるCAS不安因子得点毎エゴグラム-. 岩手女子看護短期大学紀要, **4**, 17-31.
- 願興寺礼子・小塩真司・桐山雅子 (2007). 中部大学新入生の心理的健康の年次的変化 -UPIの得点, 健康や精神衛生上の問題・治療歴の有無, 悩みの有無・内容について-. 中部大学教育研究, **7**, 63-68.
- Goldberg, L. (1990). An alternative "Description of Personality": The big-five factor structure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 1216-1229.
- Goldberg, L. (1992). The development of markers for the big-five factor structure. *Psychological Assessment*, **4**, 26-42.
- 濱田庸子・鹿取淳子・荒木乳根子・池田由子・加藤 恵・福田智子・佐藤いづみ (1991). 大学生精神衛生スクリーニング用チェックリスト (UPI) から見た女子大学生の特徴. 聖徳大学研究紀要 短期大学部, **24-II**, 125-133.
- 濱田庸子・鹿取淳子・荒木乳根子・佐藤いづみ・加藤 恵・福田智子 (1992). 大学生精神衛生用チェックリスト (UPI) の健康診断への利用. 聖徳大学研究紀要 短期大学部, **25-II**, 133-140.
- 濱田庸子・鹿取淳子・荒木乳根子・佐藤いづみ・加藤 恵・福田智子 (1994). 精神保健上のケアが必要だった学生の大学生精神衛生用チェックリスト (UPI) の特徴 -UPIの健康診断への利用, 第2報-. 聖徳大学研究紀要 短期大学部, **27-II**, 85-91.
- 橋本 翼・垂見直樹 (2014). 保育者志望学生のメンタルヘルスと支援方策の検討 -近畿大学九州短期大学保育科1年生への調査から-. 近畿大学九州短期大学研究紀要, **44**, 47-61.
- 林 悠子 (2007). 幼児教育学科学生の性格特性について. 奈良文化女子短期大学紀要, **38**, 151-160.
- 林 悠子 (2008). 幼児教育学科学生の性格特性について (2). 奈良文化女子短期大学紀要, **39**, 91-99.
- 林 悠子 (2009). 幼児教育学科学生の性格特性について (3). 奈良文化女子短期大学紀要, **40**, 109-116.
- 肥田野 直・福原真知子・藤光純一郎 (1986). EPPSの研究 -専門学校生徒の特性傾向の検討を中心に. 日本教育心理学会第28回総会発表論文集, 398-399.
- 朴澤一郎・松井匡治 (1969). 運動選手の性格特性 -本学体育学部学生を対象にして-. 仙台大学紀要, **1**, 108-114.
- 井手正吾 (2010). 青年期大学生MMPIの総合的検討 (1) -追加尺度・諸指標を含めた基礎資料-. 札幌学院大学心理臨床センター紀要, **10**, 13-23.
- 入江智也・丸岡里香・三上 薫・一條理絵・安部久美子・中里真由美 (2015). 大学生における精神的健康の継時的変化 -潜在曲線モデルを用いた検討-. 北翔大学北方圏学術情報センター年報, **7**, 25-33.
- 石田万喜子・尾崎正雄・松根由佳・副島嘉男・久芳陽一・本川 渉 (1993). 本学学生における性格傾向と不安度について. 福岡歯科大学学会雑誌, **20**, 62.
- 石原俊一 (1994). 看護学生の性格特性 (1). 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 271.

- 石川雅健 (2003). UPI (精神健康調査) からみた現代女子短大生のパーソナリティ. 東海女子大学紀要, **22**, 75-79.
- 伊藤章代 (1995). 大学生年代における MMPI 新日本版の反応特徴. 日本性格心理学会第 4 回大会発表論文集, 12-13.
- 泉水紀彦・茅野理恵・佐野 司 (2012). UPI からみた大学生の入学後のメンタルヘルスの変化. 筑波学院大学紀要, **7**, 197-208.
- 嘉部和夫・佐藤清公・成田 論・中根伸二 (1978). 大学新入生の適応過程について (6) -UPI9 年間の推移について-. 日本教育心理学会第 20 回総会発表論文集, 424-425.
- 嘉部和夫・佐藤清公・成田 論・中根伸二 (1979). UPI 項目肯定率の推移について. 日本教育心理学会第 21 回総会発表論文集, 1000-1001.
- 角川雅樹・高宮 靖 (1987). 体育学部学生の性格特性に関する調査研究: MMPI による検討. 東海大学紀要 体育学部, **17**, 27-36.
- 各務正之・平田和人・長島賢司・宮本洋通・渡辺郁雄・加藤澄代 (2000). 若年者における習慣的運動が精神的, 心理的に及ぼす影響 -大学新入生における UPI の検討-. 体力科学, **49**, 839.
- 木下 清・島田 修・保野孝弘・綱島啓司 (1997). 大学生の精神健康調査. 川崎医療福祉学会誌, **7**, 91-101.
- 小柳晴生 (1987). UPI による心身の健康と経験との関係について 臨床心理学の諸領域. 金沢大学臨床心理学研究室紀要, **6**, 31-38.
- 黒田英三・吉田浩重・杉江正敏 (1985). 大学新入生の心身相関に関する一考察 -UPI テストの回答と体力測定結果との関連の分析-. 日本体育学会大会第 36 号, 557.
- 前垣綾子・滋野和恵 (2011). UPI による大学生の精神的健康の実態. 北海道文教大学研究紀要, **35**, 115-126.
- 松田 勇・小林隆司・香田康年 (2010). 本学科学生の自我構造と基本的構えの 1・4 年次の経時の変化について. 吉備国際大学研究紀要 (保健科学部), **20**, 51-56.
- 南 好子 (2003). 対人ケア専門職を目指す学生の心の健康状態. 創発: 大阪健康福祉短期大学紀要, 創刊号, 14-20.
- 宮下敏恵・五十嵐透子・増井 晃 (2009). 教員養成系大学新入生の 23 年間にわたるメンタルヘルスの変化 -UPI (University Personality Inventory) の調査を通して-. 学校メンタルヘルス, **12**, 71-80.
- 宮田留美・中川圭子・立浪 勝・福本まあや (2013). 新入生全員面接および UPI を用いたその後の就学状況とセンター利用の予測についての検討. 学園の臨床研究, **12**, 53-56.
- 村川紀子・清水美智子 (1967). 矢田部ゴルフোর্ド性格検査においてみられる本学院学生の特徴. 平安女学院大学学報, **3**, 33-50.
- 中林忠輔・深町明夫 (1990). Y-G 性格検査による本学体育専修生の性格特性に関する一考察. 文教大学教育学部紀要, **12**, 45-54.
- 中藤 淳 (2004). 愛知県立大学における精神保健の現状と課題 (2) -健康調査カード (UPI) による新入生のデータ-. 愛知県立大学文学部論集 (社会福祉学科編), **53**, 129-148.
- 中藤 淳 (2005). 愛知県立大学における精神保健の現状と課題 (3) -健康調査カード (UPI) による在学生のデータ-. 愛知県立大学文学部論集 (社会福祉学科編), **54**, 77-98.
- 中藤 淳 (2006). 愛知県立大学における精神保健の現状と課題 (4) -性別による健康調査カード (UPI) データの分析-. 愛知県立大学文学部論集 (社会福祉学科編), **55**, 89-112.
- 中藤 淳 (2007). 愛知県立大学における精神保健の現状と課題 (5) -これまでの結果を補足することが示唆されるデータの分析-. 愛知県立大学文学部論集 (社会福祉学科編), **56**, 101-117.
- 中藤 淳 (2008). 愛知県立大学における精神保健の現状と課題 (6) -学部別データの検討-. 愛知県立大学文学部論集 (社会福祉学科編), **57**, 75-98.

- 中藤 淳 (2009). 愛知県立大学における精神保健の現状と課題 (7) - 自宅通学と自宅外通学の要因での分析 -. 愛知県立大学文学部論集 (社会福祉学科編), **58**, 45-55.
- 中藤 淳 (2010). 愛知県立大学における精神保健の現状と課題 (8) - 2005年から2010年までの健康調査カード (UPI) データの分析 -. 愛知県立大学文学部論集 (社会福祉学科編), **59**, 9-18.
- 中川正俊・荒木乳根子・平 啓子 (2006). UPI (大学精神健康調査) とその後の心理的問題の発生および学業遂行との関連性に関する研究. 田園調布学園大学紀要, **1**, 51-67.
- 中井大介・茅野理恵・佐野 司 (2007). UPI から見た大学生のメンタルヘルスの実態. 筑波学院大学紀要, **2**, 159-173.
- 中村 晃 (2003). 大学生の性格における年代的变化. 千葉商大紀要, **41**, 1-19.
- 中澤孝敏・植木一範・丸山 満・藤口 武・下河辺宏功 (2008). 明倫短期大学生の性格特性と実技成績の特徴. 明倫歯科保健技工学雑誌, **11**, 132.
- 荷方邦夫・城崎英明・川上明孝 (2012). 金沢美術工芸大学における新しい学生支援 - 支援体制の研究と学生健康調査 (UPI) の実施結果報告 -. 金沢美術工芸大学紀要, **56**, 11-19.
- 菲澤 力・高鳥 真・小林麻衣 (2005). 自己評価と他者評価の臨床実習成績における関連性について. 第41回日本理学療法学会大会, G0937.
- 西山温美・笹野友寿 (2004). 大学生の精神健康に関する実態調査. 川崎医療福祉学会誌, **14**, 183-187.
- 落合 勲 (2010). 短期大学女子学生の性格分析 - Egogram, Love-Liking scale, LPC 尺度を援用して -. 信州短期大学紀要, **22**, 1-6.
- 岡 伊織・吉村麻奈美・山崖俊子 (2015). 津田塾大学新入生における精神的健康度の変化 - 43年間にわたる大学生精神医学的チェックリスト (UPI) の結果より -. 津田塾大学紀要, **47**, 175-195.
- 岡田 督・番匠明美・益田三三子 (1992). 女子短期大学生の心理特性 (I). 夙川学院短期大学研究紀要, **16**, 1-13.
- 奥村武久・植本雅治・河原 啓・長井 勇・岡田三千代・林 光代・鈴木英子・野田恵子・木村純子 (1986). 5ヶ月間隔で同一学生に2度行ったUPIテストの変化とその特徴について. 神戸大学保健管理センター年報, **11**, 53-59.
- 大江米次郎・益田三三子・勝山信房 (1984). UPIを中心にみた本学学生の精神的不健康に関する考察. 夙川学院短期大学研究紀要, **9**, 101-110.
- 大沢正子 (1991). 看護学生のパーソナリティの特徴 - 9年間の変化 -. 神戸市立看護短期大学紀要, **10**, 1-10.
- 大浦隆陽・宮嶋郁恵 (1984). 本学のスポーツクラブ学生の性格特性及び体力について. 福岡女子短大紀要, **27**, 21-32.
- 小塩真司・阿部晋吾・カトローニ ピノ (2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み. パーソナリティ研究, **21**, 40-52.
- 齋藤和樹・小林寛幸・丸山真理子・花屋道子・柴田 健・田多香代子 (1999). 看護学生の学科志望動機, 人生の意味・目的意識, 性格特性の関連について - PIL と TEG の分析を通して -. 日本赤十字秋田短期大学紀要, **4**, 3-8.
- 齋藤和樹・丸山真理子・小林寛幸・花屋道子・柴田 健 (2000). 看護学生の学科志望動機, 人生の意味・目的意識, 性格特性の関連について (II). 日本赤十字秋田短期大学紀要, **5**, 3-8.
- 齋藤崇子・中村知靖・遠藤利彦・横山まどか (2001). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の標準化. 九州大学心理学研究, **2**, 135-144.
- 坂口守男 (2009). 学生の精神的・身体的自覚症状の動向 - 最近5年間のUPIでみた推移 -. 大阪教育大学紀要 第3部門, **58**, 45-55.
- 佐々木道子・近藤陽一・木村康一・西本典良・早川洋子・高砂美樹・桜井友子・生山 匡 (1998). 美容保健学専攻学生の性格・生活・健康調査と身体特性 (第2報). 山野研究紀要, **6**, 87-94.

- 佐々木道子・近藤陽一・木村康一・西本典良・早川洋子・高砂美樹・桜井友子・生山 匡 (1999). 美容保健学専攻学生の性格・生活・健康調査と身体特性 (第3報). 山野研究紀要, 7, 51-56.
- 佐々木道子・近藤陽一・木村康一・小野寺千鶴子・早川洋子・高砂美樹・桜井友子・鈴木さと子・生山 匡 (1996). 美容保健学専攻学生の性格・生活・健康調査と身体特性. 山野研究紀要, 5, 97-104.
- 佐藤清公・成田 諭・中根伸二・嘉部和夫・高久信一 (1977). 大学新入生の適応過程 (4). 日本教育心理学会第19回総会発表論文集, 914-915.
- 志渡晃一・志水 幸・蒲原 龍・宮本雅央・早川明・島谷綾郁・古川 奨 (2007). 新入学生の対人関係の基本的構えと精神的・身体的自覚症状に関する研究. 北海道医療大学看護福祉学部紀要, 14, 11-17.
- 志渡晃一・志水 幸・宮本雅央・亀山育海・小関久恵・竹内夕紀子・山下匡将・嘉村 藍 (2005). 本学新入学生の対人関係の基本的構えと自覚的健康状態に関する研究. 北海道医療大学看護福祉学部紀要, 12, 45-51.
- 志渡晃一・志水 幸・宮本雅央・山下匡将・竹内夕紀子・亀山育海 (2006). 本学新入学生の対人関係の基本的構えと自覚的健康状態に関する研究. 北海道医療大学看護福祉学部紀要, 13, 17-24.
- 塩谷 亨 (1996). 新日本版 MMPI 集団プロフィールの検討: 工科大学女子学生と看護学女子学生を用いて. 日本性格心理学会第5回大会発表論文集, 36-37.
- 杉浦義典・丹野義彦 (2008). パーソナリティと臨床の心理学: 次元モデルによる統合. 培風館
- 鈴木千恵・松田英子 (2012). 夢想起の個人差に関する研究 - 夢想起の頻度にストレスとビッグファイブパーソナリティ特性が及ぼす影響 -. ストレス科学研究, 27, 71-79.
- 鈴木 光・阿久津洋巳 (2007). 岩手県人と岩手大学学生の性格特性 - Big Five の観点から -. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 6, 117-122.
- 高岸幸弘・櫻井興平・橋根千尋・菅野絵里子・安東大起 (2013). 入学時の学生精神的健康調査 (UPI) と授業の出席状況との関連. 関西国際大学研究紀要, 14, 177-184.
- 高久信一・嘉部和夫・成田 諭 (1975). 大学新入生の適応について - その1 - UPI を中心として -. 日本教育心理学会第17回総会発表論文集, 310-311.
- 高岡しの・佐藤 寛 (2014). 体育会男子学生のパーソナリティ-5 因子モデルに基づいた一般男子学生との比較. 関西大学社会学部紀要, 45, 279-287.
- 高島 真・蕨澤 力・橋本尚幸・小林麻衣・一ノ本隆史 (2005). 東大式エゴグラムパターンと臨床実習成績の関連 - 2年次と3年次の比較から -. 第41回日本理学療法学会大会, G0936.
- 竹渕香織 (2006). UPI テストからみる学生の不安傾向の理解. 聖学院大学総合研究所紀要, 35, 515-533.
- 瀧ヶ崎隆司・藤村邦博 (1997). 看護学生の行動特性 (2): 看護学校入学直後と1年後の EPPS 得点の比較. 日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 309.
- 田中富士夫 (1972). 大学生の適応障害予測に関する MMPI 短縮版 (KM II) の妥当性 - その1 -. 金沢大学法文学部論集 哲学編, 19, 19-40.
- 田中富士夫 (1973). 大学生の適応障害予測に関する MMPI 短縮版 (KM II) の妥当性 - その2 -. 金沢大学法文学部論集 哲学編, 20, 1-20.
- 田中敬二・須藤勲子・大原宏子・正田美智子・新井治子・福田春枝 (1983). 性格特性についての研究 - 看護学科学生の性格特性について -. 群馬大学医療技術短期大学部紀要, 3, 149-158.
- 谷 伊織・五十嵐素子・森山雅子・杉本英晴 (2012). 女子短期大学生の心理的発達に関する縦断研究 (21) - 2年間における2時点のビッグファイブ

- ブと7時点の抑うつに関連。日本教育心理学会第54回総会発表論文集, 279.
- 谷 伊織・五十嵐素子・森山雅子・杉本英晴 (2013). 女子短期大学生の心理的発達に関する縦断研究 (27) -ビッグファイブとライフイベントが自尊感情に与える影響-. 日本教育心理学会第55回総会発表論文集, 237.
- 辻 浅夫・大山 肇・平野嘉彦・中島登代子・中村 栄太郎 (1987). 大学生の精神的健康と体力 -UPIと体力診断テストの関連性-. 日本体育学会大会号, 38B, 780.
- 上原 巖 (2003). 本学学生の福祉現場実習前後におけるエゴグラムおよび自己評価の変化について. 東海女子大学紀要, 23, 199-203.
- 和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成. 心理学研究, 67, 61-67.
- 渡辺由己・宗野恵子 (2011). UPI の特徴から見た, 大学新入生の精神的健康に関する研究. 吉備国際大学臨床心理相談研究所紀要, 8, 27-38.
- 山本隆久・鷹野健次・田口守隆・浅見高明・鴨下 礼二郎・増原光彦 (1966). 本学学生の性格に関する一考察. 体育學研究, 10, 314.
- 安福純子 (1978). 性格検査による不適応の研究. 大阪教育大学紀要第Ⅲ部門, 27, 111-115.
- 安福純子 (1982). 性格検査による不適応の研究 (第2報). 大阪教育大学紀要第Ⅳ部門, 31, 59-64.
- 安福純子 (1984). 性格検査による不適応の研究 (第3報). 大阪教育大学紀要第Ⅳ部門, 32, 169-177.
- 安永和央・谷 伊織・五十嵐素子・森山雅子・杉本英晴 (2009). 女子短期大学生の心理的発達に関する縦断調査 (3) -性格特性と抑うつおよび学業成績の関連-. 日本教育心理学会第51回総会発表論文集, 332.
- 吉村喜信・出村慎一・野島利栄・岡島喜信・勝木 豊成 (1987). 大学生における馬術競技選手の性格特性について. 福井工業大学研究紀要, 17, 367-371.
- 吉村喜信・出村慎一・山次俊介・佐藤 進・小林 秀紹 (1998). 大学馬術競技選手における性格特性, 競技意欲, 及び心理的競技能力. サークュラー, 59, 59-68
- 吉村喜信・野島利栄 (1988). 大学生における馬術競技選手の性格特性について (Ⅱ). 福井工業大学研究紀要, 18, 429-433
- 吉武光世 (1995). UPI からみた新入生の心の健康状態について -他大学との比較をとおして-. 東洋女子短期大学紀要, 27, 33-42.
- 吉武光世 (1996). UPI の有用性について. 東洋女子短期大学紀要, 28, 87-103.